

(1) 教育実習から学んだこと 〈5〉

全力で取り組んだ学習指導案の作成 (中学 国語)

文学部 4年 M.K

2011年6月16日から3週間、私は平塚市立O中学校で教育実習をさせて頂きました。初日の1週間前に事前打ち合わせがあり、残念ながらその際に指導教諭の先生に会うことは出来ませんでした。文書での指示を頂き、その日から指導案の作成が始まりました。教材や授業数を聞いたのも、その日で、私は2年生の1組から6組全6クラスで各5時間ずつの授業と、1組で道徳の授業をさせて頂くことになりました。教材は『小さな労働者(ラッセル・フリードマン著、千葉茂樹訳)』、道徳は好きな内容を選ぶように言われました。

◇指導案をしっかり作ることの大切さ

実習初日までに簡単な授業の進め方を決めてくるよう指示されていたので、初日に先生に見て頂き、その流れで進めていくことになりました。しかし実際には、ぎりぎりに変更することになり、後から思えば、この時には自分の中で“教師として生徒の前に立つ”ということを頭の中で想像しきれていなかったのだと思います。段落や構成といった形式的な部分にばかりとらわれてしまい、私自身が何を伝えたいと思いついて授業をするのかも曖昧で、変更を余儀なくされました。

その後、1時間毎の詳細な指導案を作成することになりました。きちんと印刷し、指導教諭以外の先生に配ったのは研究授業の日の分だけですが、3週間で何枚指導案を作成したのか把握出来ない程、試行錯誤を重ねました。私は6クラスで授業をしていたので、同じ内容の授業も6回行っていましたが、指導案の

通りに進むクラスは1クラスか2クラスで、他のクラスは進度に差が生まれたり、伝えきれないままに進むことも多かったです。その時に、指導案をしっかりと作りこむことの大切さを強く感じました。

◇研究授業の指導案の作成

最も時間をかけ詳細に作ったものが、研究授業の指導案です。私の研究授業は3週目の火曜日、2年6組での3回目の授業でした。教材観は特に悩むことなく書けました。これは指導教諭の先生が、私自身のまとまらない考えを整理する質問を多く投げかけてくださったおかげです。逆に難しかったのは生徒観と評価です。私が担当で入っていたのは1組で、6組とは教室も遠く、ほとんど授業だけの関わりしかありませんでした。もちろん生徒と多く触れ合うことは心掛けていましたが、やはり1組の生徒と過ごすことが多く、クラス全体の印象から先に踏みこめない文章になってしまいました。

最初の1週間は授業見学にあてていたのに、観察不足を感じました。たった3週間で、そこまで深く生徒と関わることは難しいですが、やはり学校では短くとも大切な時間であると思います。もう1つの評価はとても難しかったです。大学でも授業の練習はしていましたが、評価は全く分かりませんでした。観点別評価も偏ってしまい、教材を生かしきれていないと反省しています。

そして、学習指導案の中心である授業内容については何度も訂正し、訂正する度に長く

なっていました。最初は概略と変わらないと注意を受け、発問の整理、発問に対する生徒の回答予想を経て、その回答を生かしながらどのようにまとめるのかまで辿りつくのにとっても時間がかかりました。先生が私に対して質問をすると、私は答えられないことが多かったり、中学生には理解出来ないレベルの回答をしてしまい、生徒に聞かれても答えられない状態を何度となく露呈してしまいました。その度に先生からアドバイスを頂きながら考え、最終的には指導案に私の発問するセリフや、生徒からの回答に対する更なる発問の内容まで記入することが出来ました。

◇「言葉」の大切さ

もう1つ指導案作成において重ね重ね言われたのが「言葉」です。国語科として、より細かく「言葉」には気を付けるよう言われました。国語は言葉を操る科目だからと言われ、国語の難しさも再認識しました。正しさだけでなく伝えるということの大切さが、改めて課題として浮き彫りになりました。

まず、自分自身の考えを伝えることさえままならず、頭の中で理解することと、言葉にして伝えることの大きな差を知りました。そこから生徒に伝える形にするために更に深く掘り下げていく、という作業を指導教諭の先生に促されつつ行うことで、教壇実習の終盤には多少見られるものになったと思います。しかし「言葉」を意識し過ぎるあまり、逆に自分の中で“答え”として導き出した「言葉」にとらわれてしまい、生徒の答えからその「言葉」を出そうと躍起になり、発問が誘導するような形になったり、二者択一に至ってしまうこともありました。実習前から「言葉」には気を付けようと心に留めていたつもりでしたが、それは単純に正しさであり、言葉遣いやひいては文字（板書）の筆順などばかりを考えていました。しかし、それらは前提として当たり前のことであり、本来は気を付ける

までもないことでした。国語という科目の性質上「言葉」は最も縁の深いものの1つです。声にする「言葉」も書く「言葉」も大切ですが、何より伝える「言葉」が大切で、私が発する「言葉」は生徒たちに“先生が言ったこと”として記憶されることを忘れてはいけないと思いました。そして、生徒たちの発言を殺さず、すくいあげられるような、幅の広い理解が必要だと思います。

上記のように、多くの課題と共に出来た学習指導案は最終的に5ページにのぼり、内4ページ近くを授業内容（指導過程）が占めることとなりました。一緒に実習をした5人の実習生の中でも、私の指導案が最も長かったです。やはり私自身の発問や生徒たちの解答予想のセリフまで記入したためですが、実際の授業ではとても役に立ちました。前半にも書いたように、私は同じ内容の授業を各クラスで6回行っていました。研究授業は6回目のクラスで行われました。私自身も、クラスが異なるとはいえ、流れはつかみつつあり、発問の仕方などが慣れていたとは思いますが、その点も含め、指導案の留意点に記した流れのように、授業を進めることが出来ました。むしろ予想していたよりも早く進み、時間が余ってしまう程でした。指導案を作っている時は、とても時間がかかり、次々と課題や疑問点が生まれ、不安ばかりが募っていたのが嘘のように、大きなつまずきもなく、授業を終えました。私の教壇実習の後半は発表準備と発表に充てて、生徒主体の授業としていたので、この研究授業が、実質的には私の最後の授業でした。その授業をすみやかに終えることが出来たのは、素直に嬉しく思っています。

◇指導案は台本ではない

学習指導案と授業展開を通して私が感じたことは、指導案は台本ではないということです。私は指導案は、ドラマの台本のようなも

のだと認識していましたが、間違った考えだと気付かされました。確かに私は、指導案に流れや概略ばかりでなくセリフや解答予想までを、指導教諭の先生の指示のもと書き込み、実際その流れのままに進み終えた授業を嬉しく思いました。しかし、それら全てのセリフを書いたことが大切だったとは思っていません。私は実習生であり、初めての授業という場面であったから書きこむ必要があり、それがとても役に立ちましたが、本当に必要だったのはその前段階ではないでしょうか。まず自分の伝えたいことを明確にすることから始まり、最終的にはどのような過程を追って、生徒たちに伝えるのかを徹底的に考えること。どんな言葉を発しながら、どんな形で生徒から引き出すのか。そういったところまで考え抜くという行為が、大切だったのだろ
うと思います。結局は台本ようになってしまった私の指導案ですが、もし指導教諭の先生に言われなければ、私はここまで考えずに表面をなでただけの授業をすることになり、更には生徒からの質問も自分の想定外になって、答えられずに終わっただろうと想像がつか
きます。

生徒たちは自由奔放で、私たちの想像が及ばない質問を投げかけてきたり、驚くような発想をしばしば披露してくれます。それが生徒たちの魅力であり、個性だと思います。そんな生徒たちが、生徒たちなりに考えた意見や質問にどれだけ応えられるかが大きな課題でしょう。そのための過程が学習指導案に凝縮されているのではないのでしょうか。基礎知識はもちろん、生徒観や授業内容は生徒をよく知らなければ書けないと思います。そして1つひとつの授業（単元）に対して、深く考えることで、私が最初に意識しきれていなかった“教師として生徒の前に立つ”ことを強く感じる事が出来るのではないかと思います。学習指導案を作ることで、授業がより充実したものへと成長していくのではないかと、

私は感じました。